

森林レクリエーションにおけるスコールの組み入れ（I）

——基礎的考察と2つの事例——

九州大学農学部 吉 谷 勝 裕
 薛 孝 夫
 井 上 晋

森林レクリエーション計画に際して教化的内容の必要性から自然研究路などが設けられるようになって久しいが、外国の国立公園等に比べて内容・手法・量ともに極めて不十分である。ここに知的興味を主調にとり入れた魅力あるレクリエーション地の形成に・スコールの手法を導入した計画・設計法に関して実施と検討を行った。

I. スコールの材料と手法に関する二・三の基礎的考察

1) 森林とスコールのテーマ

整理の一方法として森林の構成要素に着目し、人間の側の認識の仕方によってテーマを区分したものが表1である。森林の自然的要素によって縦欄、人間の認識の仕方によって横欄のどの部分に重点がおかれるかが決定され、各々のレクリエーション地の特性があらわれ、またあらわすことができる。

一見つまらない事物・現象でもテーマの表現の仕方次第でスコールの材料となる。例えば山腹斜面の崩壊地でも地形・地質・水などとの関係や植生回復の状況は格好のスコールテーマとなる。

また、説明の対象は現地にある自然の事物のみに限る必要はない。例えばヤマボウシが自生していれば隣

にアメリカハナミズキを植栽して関連づけた説明をしたり、葉草・葉木の自生があればその近くに葉草を集めたコーナーを作ってもよいわけである。

2) テーマの説明

スコールの説明はもちろん正確でなければならないが、学術的な記述にとられると興味をおぼえにくいものとなる。ある植物を説明する場合を例にとって学術的説明とスコールの説明の違いを示せば、一般に表2のようになると考えてよい。

ただし、例えば非常によく似た2つの植物の区別点をテーマにすれば形態の説明に、また名前がよく似た2つの植物が全く別の仲間属することをテーマにすれば分類学的説明かたよることは当然である。

3) 表現の方法

表現の方法には次の序列が考えられ、一般にこの順序で理解のしやすさも興味をひく度合も増すといえる。

文字 → 絵 → 模型・実物の一部 → 実物

説明に絵を添えることは自然研究路の説明板などにもとり入れられるようになったが、さらに発展させて実物の一部や対象そのものを展示することも方法により可能である。例えば昆虫の変態を示すのに各段階を

表1 森林の構成要素とスコールのテーマ

認識の仕方		現象として	保全との関連で	生産との関連で	社会・文化的話題として
森林の要素					
気	象	風・雨・霧・虹 霧氷・山びこ…	防風林・防雨林 防雪林…	雨と木の成長 湿度ときのこ…	天気のことわざ 山仕事ごよみ…
地	質	地形・地層 化石・断層…	斜面保護 山腹工事…	採石・採砂 石灰岩…	山岳信仰 山の神…
植	物	各植物・分布 遷移・縹盛相…	病虫害・山火事 群落保全…	造林・施業 伐出・利用	植物と文学・伝説 国花・県木…
動	物	各動物・分布 天敵・なわばり	鳥獣保護 禁猟区…	魚類の養殖 鱒・毛皮…	国鳥・県鳥 伝説・ことわざ…
	水	溪流・湖・甕穴 伏流水…	各種ダム 水源かん養林…	水力発電 水質とワサビ…	水神様 カッパ伝説…

プラスチックに封入して説明板にとりつけたり、一般造林地を説明するのに伐期令の林木の輪切をとりつけて、その中に現在の大きさと将来の利用角材の形を示す線を入れたりする方法がある。

4) その他

設計にあたってさらに重要なことは、説明文の長さ、説明板のデザインや色、設置の位置や高さなどであるが、これらに関してはⅡに述べるケーススタディの進行をまっけて具体例としてとりまとめて発表する予定である。

表2 説明のウェイトの違い
(相対的に ◎>○>△)

説明の内容	植物図鑑の説明	スコアレ的説明
分類学的位置	◎	△
形態的特徴	◎	△
原産地・分布	○	○
利用・用途	○	◎
社会・文学・伝説	△	◎

Ⅱ. 大学演習林内における保全区整備計画の2事例

九州大学演習林内において対照的な2つの地区を選びⅠに述べた基礎的検討をふまえた保全区整備計画をすすめているので、その概要を中間的に報告しておく。

1) 都市近郊林の保全区——粕屋地方演習林

1—1) 計画地の概要

計画地は同演習林9林班の一部約10 haである。福岡市都心からの交通の便のよい標高50~100 mの丘陵性の山地で、都市近郊林のモデル的地区といえる。植生はアカマツ林と暖帯性常緑広葉樹林で一部にヒノキ人工林、スギ品種見本林などを含む。

1—2) 計画の基本方針

計画地の諸条件を考慮し次の方針を立てた。①スコアレ的手法の試行に好適な研究歩道を中心に学生の野

外研究から地元民のレクリエーションまで広範囲の利用に耐える施設をつくる。②造成保全林、加工保全林、厳正保全林の区域²⁾を設定して森林保全の手法を段階的に説明する。③これらのスコアレ的説明板と歩道周辺既存の樹木を扱ひ植物名板を設ける。

2) 山岳林の総合保全区——宮崎地方演習林

1—1) 計画地の概要

計画地は宮崎県東臼杵郡椎葉村の同演習林33林班の大部分と32林班の一部約70 ha、標高950~1,100 mの区域である。計画地を含む30~35林班650 haはすでに宮崎演習林自然林保全計画によって厳正保全林、加工保全林、造成保全林、総合保全林の各区に区分され、各種の調査研究の場となっており²⁾計画地はその総合保全区にあたる部分である。植生は一部にスギの人工林があるが他は九州の代表的な温帯性落葉広葉樹林である。

2—2) 計画の基本方針

基本方針は次のとおりである。①研究のための保全区であることを念頭におくが、地元民の種々の利用も考慮する。②森林の自然環境、特に生態の見方を中心にスコアレのテーマを求める。

む す び

計画地の環境や立地条件および対象などによってスコアレのテーマ・手法・デザイン等に差ができるのは当然である。今後Ⅱで述べた2つの計画をすすめながら問題点を実証的に明らかにしてみたい。なお本研究は九州大学演習林加藤退介教授および汰木達郎助教授の指導と協力の下に行っているものである。

1) 加藤退介「県民の森」計画構成要素について

28回 日林九支 講演 1972

2) 井上 晋, 汰木達郎

温帯性落葉広葉樹林における崩壊地の植生回復

30回 日林九支 1975 ほか